



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN



明治三十六年十月九日購入

南總里見八犬傳第九輯卷之三十五

東都曲亭主人編次

第百五十九回
助友忠諫父の志ふ代る
信隆機變族の兵を借る

却説雜兵粗岡猿八。當晚洲崎の陣ばかり来て軍師犬阪毛野が報ふ。那浦や有一の誨え方猿樂とある。扇谷の間諜兎天品出餅九郎と釣かず。其奴鈍くも謀られ。友勝もめ汲引をせんそ。同船ふうり乗りて五十子の城と投。漕走りせける光景と。と具へけれど毛野の憶ぞうも笑まく。現執と釣る勘定ふ似る。我等計の折もうく行れて。反々浦安等の帮助ふるう。ハ実ふ物怪の幸ちける事皆汝が様だ。必秘をべー祕をべーと口を鋗ゆく。人ふ知らせを。卒とそやうばく。まもよひう。かのちやあ。賞錢を取る。猿八を抜び受る。已が守屋へ退りけり。あの時尚甲夜ぞ。まざ入

定ふ至うね。毛野ハ本陣不赴き。義成主不見參モ。折りう義成主ハ獨帳中
る。燈燭の下ふ兵書を閱て在あ。舟を召入れて對面す。當下毛野ハ今
宵貞住。宿兵百五十名と從せ。大角が兩個の使と共に那地へ遣一。さ支の
趣。又東峰崩ニと韓船貝六舟。亦百五六十の隊兵を授け。其役を方へ
遣す。又立日音曳と妙真單節と。前後の別船より乗せ。一度不立
子へ遣を折妙真も。浦安牛助友勝と附。帮助不あり。又難兵、粗
情地不告宣示。言果て又立日音も四個の婦女子。前後二度遣す。
園猿八が猿樂どり。扇谷の間諜兒天出餅九郎と。釣出しき。妻の便宜を
恁々の遠慮ふられ。あれども那朝時技太郎の事も。大石憲重も。猶疑
ひて千代丸豊俊の降参と信するも。かくの如きを欲心許らし。鳥夜の投石不懇
れども。更小猿八が猿樂どり。聊試り。ふ思ふ増す便宜を。既ふ安心

仕のぬ。といへば義成主うち笑て。然く猿樂の計策へ出來過だ。と見者もあ
ん。找思ひ。いあくも能狹と捕る檣夫も。あ必野狹のありと。思ひ定わ
る。餌とりく。涼と樹て待て。狹必寓來。其涼が入らぬ。汝が今宵
筈計も。則又あの理。那敵の間諜兒が必其浦邊邊か在んと。正可。思ひ
ぬ。されども謀る所暗合。而毫も錯ざり。凡智のよく做を所す。是
ゆも。媒鳥をり。秋小禽を捉る者と。則是同一理。既や。七敵の間
諜見。汲引を。妙真單節。友勝へ。毛野の畏と額衝て。臣も。智術の
や信容られ。鳴平謀。も哉と稱え。毛野の畏と額衝て。臣も。智術の
所以。不あ。是。這回の拙策始。其圖不當り。則錦の脚盛徳也。天祐
ひり。機變。実。已。と。浴ざる所行。と。ひ。と。ひ。を。義成主。ゆ。を。否。と。ひ。然る
い。之。機變の巧。聖賢の。必。婦。所。ゑ。ど。孫子。ふ。兵。詭。道。と。ひ。る。あ。故。ふ

孔聖の事不臨々必怕れ謀を好て成さん者へ。となりふあふも。然ば機変巧も。善ふ與して仍へば必や饒されん。邪智の機変へ必害あり。豈一列ふ論せんや。又がり未既ふ敵の寄きよと少く。八日未遠きを。今大寒の晌東水戰を。上日とせら。敵の淺慮ひ。不ゆも足すねど。自家の士卒愆す。海ふ落ゆ者や。立地ふ凍死ん然。然うでもも脚冷龜りて。干戈を操るふ不便きべ。ある美を豫思する。然と向て毛野ひ答てぬ。然シハ寒、天の水戰へ。自他の不便仕じ。年來知せぬ。當國ハ冬暖き。氣候違ひ。秋暑裏不水軍を調煉處ども。年來知せぬ。當國ハ冬暖き。氣候違ひ。秋暑裏不水軍を調煉仕じ。既ふ初冬の時候。立地ふ。這頭の海水温えべ。馬不乘りて海を涉素馬脚。冷ぞ凍ぞ。あをり。血氣壯勇士卒ふ。泗ぞ。もひひ。今大寒の時。水反て温へ。況八百八人の拙策。行冠ひ。海水も涼や。湯か做るべ。あの美御機念あべく。と父を義成主理もと心て。餘談不

冬の夜深ふけり。話分両頭。あの日十一月五日五十子の城内。今朝早天。赤品百中。皆節と船帆を賜り。貌姑峯路へそ覧。後定正顕定相計り。則水陸の隊配。这里も亦間諜兒の住進。據て敵の備と。多く。總大將里見義成。安房の洲崎が本陣。構て。則ち。在。軍師犬阪毛野胤智。防禦使。犬山道。即忠與も。相從。是を守る。其隊の軍兵一萬二三千。又陸へ下さき。國府臺と根城。義成の嫡子里見冠者。義通。總大將。老黨東六郎辰相。兵頭杉倉武者。助直元。是を守る。又其城外。矢研河を前。而て。防御使。犬塚信乃。成孝。犬飼現。ハ信道。も。是を守る。内外の軍兵一万。不足。又行徳口。防禦使。大川莊人。義任。犬田小文。吉保。順大將。矢研の下流。行徳の入江河邊。其隊の軍兵七八千。過だ。ふの他。安房上總。四十八箇城。故の如く。城、王頭人。是を守り。海邊の備も。困る。

至。相村の城へ義成の三男。里見次丸。老黨黒荒川兵庫助清澄。是二三千人。士卒と俱ふあれを守り。瀧田の城へ義成の父。里見治部大輔義実。致仕は老。當。黒杉倉木曾八氏元。堀内藏人貞裕も。相従ふく是定を守る。鷲城の士卒。僅ふ二千五百人。と云是足ふよて。洲崎へ向ふ水戦の總大將。管領扇谷修理。大支定正。並ふ定正の長男。式部少輔朝寧。小幡木工頭東良。大石源左衛門尉憲儀。武田左京亮。信隆是をもと宗徒の大將とて。あの隊の軍兵三萬餘名。巨艦數百艘。ふくら衆々。本月八日の曉天。徑。洲崎へ推寄せん。と。入下總。久。國府臺室。い。管領山内。兵部大輔。頤定。足利左兵衛少督。成氏を。兩大将也。頤定の嫡子。上杉五郎。憲房。並ふ。白石城。久里勝成氏の家。え。よ。から。す。あ。ひ。出。あ。く。不。こ。く。と。ゆ。ら。れ。あ。ひ。きて。え。年。ま。え。ま。る。か。臣。構。堀。史。在。村。新。織。帆。大。夫。素。行。も。是。ふ。兩。隊。の。軍。兵。三。萬。八。千。又。行。と。之。ま。ま。う。す。だ。こ。う。ま。う。あ。う。ら。し。の。す。け。も。ち。よ。る。よ。く。は。せ。ち。お。い。が。み。の。徳。へ。定正の嫡子。上杉五郎丸。朝良と。千葉。久。自。胤。と。兩。大。将。也。大。石。石。見。

守。憲。重。原。播磨。久。胤。久。相。馬。郡。領。將。常。稻。戸。津。衛。由。元。も。是。ふ。従。ふ。西。蔭。軍。兵。三。萬。餘。乗。漸。く。走。附。く。士。卒。合。て。水。陸。の。兵。を。慮。八。九。萬。ト。及。び。く。伴。り。そ。十。五。萬。騎。と。稱。え。り。既。ゆ。て。諸。方。の。隊。配。が。の。如。く。定。く。れ。あ。朝。頤。定。父。子。成。氏。朝。良。自。胤。柴。濱。よ。う。艦。ゆ。く。或。ハ。兩。國。河。ふ。涉。り。或。ハ。徑。中。川。推。渡。そ。夙。く。要。害。と。食。ま。ん。と。士。卒。の。艦。ふ。餘。ま。る。歩。下。り。く。も。ヨ。ヌ。ろ。け。り。升。ぐ。中。ふ。成。氏。ハ。初。大。石。憲。儀。グ。約。束。ふ。言。違。ひ。定。正。頤。定。の。管。待。恭。一。ク。モ。况。今。番。の。總。大。將。ふ。事。を。ぐ。も。あ。き。れ。ば。獨。憤。胸。不。滿。歩。下。り。く。も。ヨ。ヌ。ろ。け。り。升。ど。在。村。恥。る。色。き。悄。地。ふ。主。を。寛。解。る。や。御。憤。へ。然。る。と。豆。下。臣。等。事。業。勢。ふ。より。そ。那。肚。裏。と。推。量。ひ。定。正。も。頤。定。も。底。意。え。我。君。と。推。尊。す。ざ。る。ふ。や。ね。ど。近。國。の。諸。將。來。會。あ。れ。其。兵。權。を。失。へ。と。胡。意。恭。敬。の。礼。成。

盡き。遂莫幽府臺の寄隊矣。他既ふ我君と。摠大將ふ做一まあを。顯定ハ副將まべ。且水路ハ安房へ近けれども。那裏僅四郡の。上總ハ安房ふ五六倍して。四十餘城。魚米の地へ然べ下總より攻入りて。早く上總と。要合せ多。其軍功定正主の水戦ふ十倍して。兵權立地ふ我君の御堂ふ入る。何の御疑ひ。必大功へ細謹を省む。大礼ハ小讓と。辭せ。小忿を忍ざれば。大謀と乱る。とす。今一姦妄時。忍せぬ。臣も慙而ひへ。宜く計ひひじて。うち任まを。と。説惑せ。便佞利口ふ成氏淺も憤り解く。又阿容々と。頭定父子と俱ふ幽府臺と投て進發。後悔あふ立ざるべ。有倦り一程ふ扇谷の内官領持資入道道灌。其子薪六郎助友と。名代や。あの日五十すの城ふ着到。助友てせまん。そのこえろくらすけも。と。隊兵三百餘名。昨日相模。糟谷の館と立ぬ。極うや。今日ふ逮。ども敢ち。遅參と。恥る色。推く定正王ふ見参て。父の意見と。舒くい争う。曩裏。

愚父道灌屢諫書と。里見を御征伐の不可。與うと。稟あふ。御用ひ。かず。既ふあの期ふ及せぬ。今ゆ。是非の行なべ所ふあら。あれも人の臣と。其君の非と。知り。猶も孤忠の詞を盡き。共ふ傾覆を俟。が。不義や。且愚。抑那義成父子の世ふ稀。良将也。當家と怨と結び。又。別又其良佐。者ふ仁義八行の八犬士也。東荒川杉倉堀内の毎も。皆一人當千。く。其封疆を守る不足れり。然る。今鳥合の衆を。多ト。さり。一時ふ水陸も攻。克。思一召。卵を。石と。厭。火と。夾。水ふ。櫛。甲斐。武。枝。あいべ。臣も。愚心意り。是を思ふ。里見の腹心の患ふ。ある。後の事。ひふ。を。則。是頭定。主と。北條長氏。あい。反て。頭定。主ふ。東ね。詞を卑く。あく。俱。里見を伐。あ。口前。面。不。背。と。忘。ま。御。不。覺。ふ。あ。き。らん。倘。幸。ひふ。今番の戦ひ。ふ。克。せ。者。あ。兵。權。反。て。頭定。主。奪。

とことをも。又戦ひ利ある是より怨を里見氏ふ結びゆのことを御方の
諸将離れ叛たる地を削らるる至る時悔く及せゆべからず。而るどりんや宣
えや。今大寒の時候す。水戦を上日とて。士卒の足脚龜り。擣に自由る
るべく。且昔日ゆゑ近世も。安房上總と攻伐を。船を渡せ。例を喰う。水
行其路捷けれ。海岸ふ巖巖ヨヌ。波濤暴れ。船寄らる。故ふ極て
危し。敵の海邊遙か成長と。水戯水馬。自由ゆむ。不知案内者士卒を駆る。
這寒天ふ水戦の時。敵をも知。召れぬ。謀の軍とのまゝ。顕定王。あ
り。理を知る。欲君と俱ふ水路よ向ひ。其隊配の折ふせ渡る。反く國府臺の
敵ふ向ひ。是其奸智ふ長る所。姑且成敗を見んと。そきと悟る
足。そ朽惜けれど。席を柏ち。回を犯して。親ふ代まる。孤忠の誠意諫言細
ち。そりり。定正の。もろ果を。怒れる。回の朱を沃ぐ。眼と瞬り聲耳苛立ぐ。

やそれ助友過言。親道儀が分付す。一言一句の斟酌も。敵と美く
自家と訛る。开と忠臣との。食や里見の。近曾我不忍せ。大山道節。大塚信
乃。もど引へ。隣園ふ毒と流せ。罪重がと今伐去。後世子孫の患ひと
きえ。且顕定は同宗。送ふ不令胸解け。今我帮助ふ。おゆゑと。猶疑り
誰。も。愚人。况や今寒天。其利を棄て。水路をやむ。孰の日。那根本
亨。稻村の城と。抜ん里見の土卒。され。水族。およもあ。下寒天の水戦よ。自
家の。足脚。冷龜ら。敵の。足脚も。同ト。か。そ。左まれ右も。あれ我。神仙の。帮
助あり。又術師の。御導す。必ず。必勝。究理ふ。され。今征伐の。時。不方り。不吉の
詞を盡せ。饑され。大不散。其罪重を。知る。親道儀糟谷。在り
き。我催促を。駕。聞ゆて。今。す。辱ふ。爾を。名代。聊。辱。土卒を
あ。ま。不忠。外聞。過言の條々。今。も。饑。か。覺期を



せよ。と馬れども助友阿容る氣色、御詫でりとも。昔も今も良將へ幻術賣トの巣敢危枝と憑むとやひ危耳を貴と目と賤そ。竒巧を好めど必竒禍也。其も亦是御行の一小そひけれ臣ちが遅參を咎め宣旨今參る。尚早う。親道灌ヶ教ふうそ。敗軍の折御危窮を極ひもろん為ふそといを果定正ハ敦園に猛く衝と身を起し。以まればこそ君臣上下の礼と乱る。烏滸の白物。命根断くれんぞ。と罵りえども佩刀の柄にてを挝き引抜んと走りを。あ席下傍り。武田信隆驚て吐嗟と走り身を盾ふ推隔々刃を拔せ。助友が與不陪話てゆす。在下と信昌の名代。す。遅參の罪あり然ると他人の為めも過言の罪と勸解。稟表打歩の杭不似れども。今助友が宣志一毛へ則。親の口状を憶き嫌忌涉り。年尚少た所以ゑばいう。恩免を賜か。縱其罪是ありとまこと。

他が親持資入道の年未軍功。ヨリ世の人も知る所無。ひまき一個の敵とも伐れど。反て有功の家臣の其子を誅し。必敵ふ笑ふ。這義を思へ召さむ。と為ふ諷諫の詞を盡を程ふ。左右ふ侍り。大石憲儀及箕田馴蘆。も已工をひき詞を添ふ。共侶ふ寛解しき。定正僅ふ怒を醫め。故の登聞ふ樹る時。憲儀聲をぬり立す。其新六郎罷り立ね。既よ退り矣。と遣り立す。助友へ応もせ。艴然と見立す。微子へ去り。箕子へ是が奴と做り。比干へ諫ゆ。則死せ。我大皇國也。越後中太あり。寧忠臣の拘とる所と。乱離の人ふるべ。後又思ひ合されん。と啖た食ぐ身を起す。徐外回へ退る。とやく。隊兵三百名を従へ。糟谷の館へ返り。欲或ひ淹りて中途ふ在る。知足を知る者ふらけ。然が日定正の怒を寛解。助友を恙もろく退く。武田左京亮信隆は素是上總。廳南の城主。初信隆衍。那。

十子の城へ來會せり。とあり。かど信昌へ生心して。敢其兵を急び。老黨
甘利。堺元。等と召集へ。あ爰誰何と詮議あり。堺元。がりゆ。那裡見義
実義成父子。當今稀見る良將と云世の風聲。あらゆ。ひ秋刀又隔。昨歲
當國。ふ旅宿にて。料を館。見參。大塚信乃。犬山道節。智勇兼備。
俊傑。す。君の知。召所。今。其黨都て八人。皆里見。相仕。重用。大さ
き。ぞと云。風聲。紛れ。是虎。翟異。添。如。勍敵。ふ。城。
管領。島合の衆。を。代滅。さ。欲。も。と。克。あ。ん。や。當家。
猶幸。ひ。北條。を。厭。の一役。あ。加勢。の。士卒。を。遣。ま。る。權且。其。成敗。を。御覽。あ
ま。が。と。云。意観。憚。所。す。ら。と。武田信隆。を。よ。と。制。め。と。信昌。ふ。向。ひ。て。ゆ。す。
甘利。が。一議。そ。理。わ。れ。も。加勢。の。軍兵。を。遣。ま。る。兩。管領。必。怨。ん。今。在
下。ふ。隊兵。三百名。を。借。い。ゆ。則。館。の。名代。と。唱。く。五十子。の。城。ふ。到。ら。ん。篤而

那里か到るといへど。兩管領の相輔あへは。又里見あも從つりぐ。在下さ一箇かの持も。迄まをりく。輒まく廳南あの城しを合あふ復かして。故ゆゑのどこふ是ぜを領あせん。ひくとあの姿すを饒じきめ。と其そ々を請う求める。信昌しん昌まさ。訝いりく。和殿わ我わ名代めだ。として。五十子ごの城しを造つりて。反そや兩管領の相輔あへは。又里見あも從つりぐ。舊いの城邑じゆ廳南あと。食くんという。あらゆる。言こと詳くわふ示し。と向むかへば信隆しん然ぜんシ。計くわ密ひそみ。可と。機き不ふ臨りん。變か応おむ。進退しんたい。肚裏はら。在下さみる。剣けん。开あ。齊せい。謝あ。在下さみる。剣けん。开あ。齊せい。謝あ。在下さみる。時とき。久く。喪ま。易か。饒じき。と。天地あ。誓ちかひ。請う。信昌しん昌まさ。猶よ思おも。難ひ。又また。堯元ようげん。不ふ意い。見むか。向むか。堯元ようげん。一いつ霎な。時とき。沈吟しんぎん。と。人ひと。異こと。異こと。友とも。擇えら。竟い。不ふ。城じゆ。地ぢ。喪ま。浮浪うりよう。一いつ檢けん。及およべよ。其そ本もと性せい。胸むね。逞うなが。且また。義よ。智ち。術じゆ。謀ぼう。所ところ。惡あく。事こと。多多く。饒じ。第一だい。多多く。あべ。當家とうけ。稟うけ。恩おん。仇かう。館たて。御ご。爲ため。有あ。ベル。

不義ふぎ。自業じぎ。自得じとく。倘幸じやうこう。其事じご成なら。這里さ然ぜんせ。帮助すけ。做な。親族しんぞく。故鄉こきょう。錦きん。壯衣よそ。還か。城樂じゆらく。欵ひ。先事せんじ。試しこ。二三百にさん。軍兵ぐんbing。授あ。五十子ご。遣け。一事いつ。兩用りゆう。欵ひ。信昌しん昌まさ。ふ。之の。卒然そつぜん。其望そのむね。任あたせ。左京さき。信隆しん隆ろう。動うご。卒然そつぜん。其望そのむね。任あたせ。左京さき。信隆しん隆ろう。恩おん。辨べん。別べつ。告こ。上總じょうそう。今いま。所ところ。從つ。士卒しづく。十四じゆ。五名ご。俱とも。件くだん。兵ひ。ね。夙ゆく。夙ゆく。甲斐かい。府ふ。立た。去こ。胡意ごのう。中途じゆつ。淹留えんりゅう。十じゆ。月げつ。五ご。日にち。朝あ。五ご。子こ。城じゆ。諸將しょじょう。行德ぎょうとく。園府臺えんぶだい。出陣しゆじん。其迹そのしき。入替いれかわ。定正じょうぜい。其遲そののち。外口ほかく。壯裏衣じゆりい。遲着ちゆう。障さり。云い。云い。頼の。陣じん。定正じょうぜい。反そ。其遲そののち。外口ほかく。壯裏衣じゆりい。思おも。武田むた。信昌しん。既い。是い。西に。厭あ。一役いつ。あれ。加勢かせ。餘計よけい。軍役ぐんやく。且また。這信な。隆ろう。素す。是い。上總じょうそう。廳南あの城し。王おう。一いつ。里見あ。義成ぎせい。矛盾ぶつ。衝つ。果か。

魚城を攻落され。甲斐の武田ふ身と寓る。人の噂ふ豫知ぬ。有僕まべ
安房上總への人如法案内。且義成ふ心あれ。敵ふ脇く自家に帮
助す。と必見らんと尋思をあつて。姑且身邊か佔ひ。安房上
總の地理虚実城邑のヨヌ寡剛柔を甲しと。問放す。と慮り。思ひ。今
助友が父代まる。孤忠の諫言忌む。稟然とて烈火れば定正怒ふ
堪え。てうち。ひ敷きせんと。敦園。信隆為不勸解けふ言。听れ事。早
く。異ふ理り。件の意味あれ。現乱世とひひき。笑の中。ふ刀も。飯の内も。鍼
灸をあ。信隆が胸の機闊。善惡邪正孰。や。鬼神も。量らざるべ。

第百六十四回 偉士相桃む丙枝の花

名將許容る内應の貢

余程ふ定正ハ五十子の城近江濱邊。大石憲儀奉

也。其船と展檢。約莫柴濱より。大森六郷まで。海岸ふ維ぐ大小の戰
艦千百數十艘。這内中。鯨筋幾十艘。ふ柴木焰硝の類。都て燃草をヨミ
採入る。ふ憲儀の家臣。仁田山晋六。武佐是を嘗り。夫役を駆て柴を運
る。名ゆ負ふ。あの地方ふ素より。是柴ふ富。其故に當時柴の浦人ハ冬至
月の初。其年の暮まで。海苔を採り生活を。其海苔を採る。波濤
至處より。十數間水中小よく柴を建く。籬籠の像く。做一措。波濤
搖る。海苔日日ふ這柴ふ樹る。採り。漉て且乾て賣る。地方の名産と
俗の方言ふ名づけて。ひひと。近曾ある人の狂歌。小越谷。吉山。
わう玉の。と。賜ふせんびの乾海苔。作者按。まるか。ひよ。と。ふじ。よ。海苔と
のり。建る柴ふろ東。日日ふ樹れ。躰て其柴を呼。日日と。ひよ。海苔名

柴と尔も。這柴を据りて。廻國雜記。道興准后の柴浦。よみみ
シ歌ふ船よりつむ柴のうる人とあり。即今の芝のゆゑ。本名ハ更級日記。
所云建柴の浦。即是ヘ其柴を建るゆの故りる證と云ふ也。或へ又太田道
灌の平安紀。行ふ芝浦。すとある歌ふ露あけに道の芝生を踏る。駒こま
さむ。海邊の真砂子地。あらえ。結縷草。俗小芝と。おなづ
芝。かけく詠る。歌人の比興の。心と。もべく。又按。柴木小程遠く。收
地名。小日比谷と喚做す。昔へ這頭より。日日の柴を。専伐坐す。柴と
日日谷と。公私。猶考て。正に照驗と。別。識。も。あ。昔柴木。柴の。ゆゑか
アリ。を解く。間。話休題。有。係。一程。十二月六日。晴天。音音曳
て。順風。吹送られけ。船。柴濱。果。目。今。船。柴。採入。支役

每を喰て。安房。奴皆。悄地。安房。より。來ゆ者。へ。管領様の御内。ある
との。乞。對面。願ひ。ゆ。あり。より。稟し。ゆ。と。へ。大家驚。且。訝り。く。
安房。欲。き。ど。走。仁田山。正日。六。告。見。ば。正日。六。亦。驚。ひ。ゆ。先。其
船。と。掛け。ませ。船械。を。奪。ゆ。許。ヨヌ。船の。簡。へ。緊。く。維。せ。隊。兵。残
ね。船。傍。近。つ。走。そ。兩。個。の。婦。人。を。相。る。一。個。へ。年。六。十。有。餘。ゆ。骨。相
賤。一。個。ぬ。婦。へ。又。一。個。へ。年。二。五。六。み。や。む。顔。容。の。愛。と。不。惜。ひ。一。牧。婦
あ。あ。す。音。普。等。不。向。ひ。て。は。ゆ。婦。ち。は。是。安。房。人。欲。傳。折。ふ。憚。り。も。く。何
ぞ。敵。地。より。來。ふ。け。あ。そ。惣。は。我。へ。扇。谷。殿。の。麾。下。の。一。諸。侯。當。國。大。塚。の。城
主。亨。大。石。石。見。守。憲。重。王。の。家。臣。す。郎。君。源。左。衛。門。尉。憲。儀。主。不。隸。え
た。仁。田。山。正。日。六。武。佐。是。憶。ふ。若。們。の。吹。流。され。欲。を。も。這。頭。が。故。御。で

還りて放と向ふと音音の聲あへまへ否。我們の然る者多く故主の與内應の
密使ふ參り候。其故の箇様々々と千代丸豊俊の事の顛末且闘戰比
時小臨く裏伐と里見の船を燒き欲する進退を實に登る耳を告ぐ。
其言果て又はち。千代丸の殘黨の世を潛ひて安房小在候者百十數
名候れども女子を立て漁舟ども遠く坐まど饑されねば已と云ふ。我們が
大事の使ふ立候。良人も兒子もあの春の闘戰ふ陣歿あれば媳共侶ふ
婦婦小竹ら數多ねども我名を樋引媳婦の臥間と喚做し候り。うそあ
妄を御主君ふ稟上ゆびと鷹も曳みも共侶ふ其漏る者と補ひ。本末乱
さを哄誘せ。晋六岁も點頭て原来和女も豫聞く。上總の敗將千
代丸氏の殘黨也あつて。歎そのお義が差錯る。那人當家へ内應の謀
書を必齎して。とく坐ねと云ふ。音音の羞る面色にて御用事の

慌しくて开ひとうと算れぬり矣。非如其書へあへども浮うること失候をか。と云ふ
えろう。晋六岁も黙れ。騙兒奴舌長。縱使ハ女流でも忘る東西ふ事を缺く。
降人裏伐の願書と。と來ぞと云。慄兒あらんや。必是若們ハ里見の間者を疑
ひ。結刃れ兵毎饑ますと訛聲高く喰れ。捷雄の夥兵五六名羨りぬと
応も果せ。船ふりりと乗積り。音音曳も云云と事ふ分説を听へて。十
九三四捷奥にて索を櫓んと闘く折る。前面より來ゆ快船一艘。澳の真風ふ
だぞ。袖頭ふ在りける一個の漢子は是則別人す。仁田山晋六も火家也。
いゆ。此間謀の為ふ。安房へ遣されて。那地ふ在りけ。天岳餅九郎要て在り。登
時餅九郎聲慌しく。遂に人々を下へそちねくと制られ。晋六もある什
麼と訝り。畢竟兵を制り。もう程もう件の船。徑ふ突然哩と共中りて。

早く水際に寄りて。餅九郎の磯に陟り。其頭ふ立ち。晋六が耳を被よ
せき。悄説る。友勝と妙真軍節と指して事の由を告る程。既ゆて天へ
明けり。浩處。大石源左衛門尉憲儀。聚合一戰艦と展檢せんと。五六
十個の士卒と領く騎馬苛め。五十子の城うちで奉られ。仁田山晋六天晶餅
九郎。邊へ是を迎へ。訟宣示をばら。とを憲儀うちで馬下アマシテ
せうぎ。當下晋六。千代丸。豊俊。降參を請ふ。前使の事を告れば。
餅九郎も亦。豊俊。再度の使。濱縣馬助。母と女弟を推方で來ゆる折の為体。
馬助。故朋輩。某甲を投殺スル。餅九郎が偷見て。豊俊。裏伐の内應。
詭譎。取照据をねえ。其使馬助。男女二名と同船ある。から來ふけ事の首尾を詳く報へ。憲儀點頭うち歎び。隨即音音申ると。友勝
妙真軍節も。都て船より召登て。みづか又其来意を尋る時。降人の作

法されば。そ。晋六。則。友勝。両刀を帶ること。饒ま。恁而友勝。所。
餅九郎。報ると。毫も差ないと。友勝。千代丸。豊俊。サ舊臣。濱縣
馬助と偽名告て。則。豊俊。裏伐の謀状書を呈され。妙真。馬助の
母。戸山單節。馬助の女弟。叫子。音音。樋引曳み。臥間と各名を変て。
俱。憲儀。辨謁を。登時。大石憲儀。件の謀書とも用ひ。と見て。畧々
懐ふ夾めて。豊俊。裏伐の情願。既。我間謀。児。天品山。餅九郎。見出
きて。相違。や。と。今。ゆ。疑ふ。でもある。水戦。大後日と定める。其折残
黨獄と。破り。豊俊。と。鴉生て。俱。裏伐。て。里見の船を焼くべ。との故ふ
と。やう。三個の女子。保質。城内へ召掛け。但一御方の士卒们。豊俊を
認くる者。あ。されば。樋引。と。ゆ。其姫を。武佐。管。て。船不留。豊俊。

女流を留
めて憲儀
豊俊の謀
書と受く



來出る折の眼兒ふせよ。又濱縣馬助へ悄地に安房へ立かへて。残黨並に故主
豊俊へ報て裏伐の準備をへそだね。我へ徑不五十子へ退りて言上不及がべ。あくろ
おる歎と宣示せり。大家ひとうく業額傷く。升ざ中は友勝へ唯々となうふ。言業
を立まく。當下仁田山晋六を一旦没官する。友勝が両刀を卒と返せば友
勝へ受戴名腰不帶びて。妙真音音曳き軍節の目を。汗一あらぬきて却
憲儀へ拜謝し。且晋六と餅九郎も別を告ぐ退る。船うち乗り艤と推
建て安房と投て漕去りけ。余程の大石憲儀へ天品餅九郎不分付て妙
真の戸山曳みの臥間單節の叫子三個の婦女子と。升ざ儘ふ推立て。俱十五
十子の城ふかり來つ。隨即主君定正が千代丸豊俊が裏伐の謀状を聞く。
且裏安房へ遣る間諜見天品餅九郎が俱て來け。豊俊の密使濱
縣馬助と老弱四個の女子のを頼末送きゆえ上を定正へ其書を閱。

其言を聞く。歎び堪ざ。含笑れお額と拊て。憲儀ふりゆう。往る日海も空也ん。
那風外道人が遙る安房の方と見出で。洲寄ふ隱ぐる黒氣也。異日
那里ふ内応の者あんとひ先見果てて違ひ。今料らモて。千代丸圖書助
豊俊。内応の吉事。別又赤品出百中。武田信隆の便宜をひく。皆是自家
家の洪福。今番の征伐必勝必利。何の疑ひある。件の戸山臥間叫子と
うし女女子毎と保質ふ捕置が。升る箕田馴蘭二を管けて。是も下知を
聞戰の折約束を違ぎて。那風を吹きだ。身を一憑みひむ。又保質の女子
へよと詞をすき。分付る。面色あふ快然す。憲儀これを業り。御談の如く這
回の吉兆第一義は風外道人の風流ぶりが臣ち明日谷山お赴き。ゆく八景
事へ馴蘭二を御談を傍へて。併くうち守らせひべ。相あうて心て脇て退を。
却箕田馴蘭二件の下知を示して。俱くる妙真曳き軍節を升ざ。今

與一入又不許。他等ハ比百女流されど。千代丸豊俊が保質され。日夜の守と
固く守。其番卒の頭人。家臣朝時枝太郎と天出餅九郎と附置ん
和殿も折々由断う。宜く心を屬てよと諭せ。馴蘭二謹ミ業て。則件の三
個の婦人を乾淨する。一室未在せ。恣ふ外ゆると許す。枝太郎と餅九
郎。あの勤番の頭人。氣が五六個の雜兵を従ふ。迭代りふうち守りて居り。然ぢ
地ふ跋ふ虫水ふ住む魚の雌雄の媾合。是れあり。是れ這餅九郎と枝太郎。年
三四十ふ至る。尚獨寝か。妻ふれ。曳き單節。年少くて且愛を棄
面影の羈と。做て暇。勤番ふ倦を厭。現野の花。目ふ艶く。村酒の全
醉矣。心地さへ。堪ざり。傷ふ人の互に折ふ餅九郎。ハ悄々地ふ枝太郎と
商量する。我意ふ。那叫子。千代丸の残黨。瀬戸内縣馬助の女弟。要。是が良
後。手を宣ふ。心を稟。一歩もあらず。既ふ遠意あり。うち守つての三日一暮
き。恰も画る餅を見て。饑を忍禁ふ異争だ。然び先那戸山不告。媒約ふしく
誘ふ。後ふ乞稟。思ひ甚麼。と悄語。枝太郎の笑に向て。歎の頤ふ
悔ふを覺む。うち頷く。答ふ。然び咱等も亦其意あり。曩裏や。我も間
謀の役也。姑且安房ふ在り。時箇様々の不造化也。一旦捕。捕られ
かど。餓されてから來。里見殿の心操。と那里の虚実を大爺ふ報。稟ま
小功也。おどりて和王と共侶。那姫一個を乞まん。あの姿を戸山の
媪ふ告。先あ縁を結び置。迷ふ樂一かぬべ。和主。臥間。欵叫子。欲。

陣歿ある。となれば向でも多ぞ早移家へ。然びそあれ。甲も乙も。宿寐不娛
に底意。郎欲を思ふべ。我も亦美婦欲得と。久く求めど。是が姫。い
き今番の恩賞ふ。叫子まれ。臥間。相公ふ乞をり。娶もく思へど。勝軍
後。手を宣ふ。心を稟。一歩もあらず。既ふ遠意あり。うち守つての三日一暮
き。恰も画る餅を見て。饑を忍禁ふ異争だ。然び先那戸山不告。媒約ふしく
誘ふ。後ふ乞稟。思ひ甚麼。と悄語。枝太郎の笑に向て。歎の頤ふ
悔ふを覺む。うち頷く。答ふ。然び咱等も亦其意あり。曩裏や。我も間
謀の役也。姑且安房ふ在り。時箇様々の不造化也。一旦捕。捕られ
かど。餓されてから來。里見殿の心操。と那里の虚実を大爺ふ報。稟ま
小功也。おどりて和王と共侶。那姫一個を乞まん。あの姿を戸山の
媪ふ告。先あ縁を結び置。迷ふ樂一かぬべ。和主。臥間。欵叫子。欲。

陣所。遠見の為ふ隊兵を領て。其頭の浦巡りと致る。兩個の小兵頭印東
小六明相。東六郎辰。荒川太郎一郎清英。清澄。もと二個の駕込兎を撃捕て本
陣へ率りて來り。俱ふ訟稟をす。臣も方僅。這浦續たる馬頭上也。這三
個の駕込兎と生拘く。來歷止處を責問ひ。他も素藤と同惡也。
署裏ふ廳南の城を没落する。武田左京亮信隆の使也。當御陣へ參る者
といへ。あらゆるごくいへども。敢是を怨ふせむ。憲斷を請むるどひ。是ふよろ義成
主へ端近くゆく。其生拘もと実檢あり。則軍師大阪毛野奉りて。其言れ
虚実を鞠問を。大山道節。明相清英の隊長あれ。俱ふ這詮議ふ與り
けり。然べども生拘二名の内ふ。武田信隆が猶子也。一條端四郎信有と喚做
き。一個の社校あり。その者則陳きてゆ。小可も。今番信隆の密使ふ立
き。椎て御陣へ参り。則是別義ふひを。署裏も信隆謀。草薙田素

藤と親りかづく。交遊の罪脱るふ路す。竟ふ御敵とよりてより。脆くも勢ひ窮り。一二の残黨と共侶ふ。乱戦の中ふ命を免まし。甲斐國へ赴き。國主武田信昌へ親族免が身を寓る。今まで那里ふひじる。扇谷より。信昌へ加勢の矢等、まことに。扇谷の從軍ある。軍兵を催促せらる。信隆是時をゆく。請そ信昌の代軍にて。隊兵絶え。三百餘名を領く。嚮ふ五十子の城ふ到る。然ば其志。陽子。扇谷の從軍ある。先非を悔く。當家の仁義を景慕の臆念既久し。ひそで舊罪を恩赦あらん。異日闘戦の時ふ臨く。信隆必裏代して。あり大功と奏まべ。其忠功あらん。かく。舊ふ因く。膳南の城を返一賜へか。情願只今御許容あらん。免許の御書と賜く。異日の證文を做す。欲も言偽りを爲ふ。至れり。一條信有を保質や。召措せらる。爰。信隆。ぐ。ま。五十子の城ふ入らばり。以前略史。悄地ふ小可考ふ。使を課せひ。信隆が口呈書の秘と。

小可考。衣襟の裏ふ在り。合ひ出しく。尙古。相違あるべからず。とひけり。義成是をうち少く。隨即明相ふ。分付て。其信隆の口呈書を合ひ出させ。毛野ふ讀せ。字あふ。其文今信有がり。趣と。聊も違ふとあらず。尾ふ數行ある。折言文ふ。血を沃び。赤心を見し。義成是を听果て。毛野と道節と見う。汝もこの義を何と思ふや。墨表ふ。武田信隆。武田素藤と交り。人を知る。行心免ども。畢竟義侠の本性免が。勝るゝと知り。も。一旦逆徒ふ與せしを今悔く。思ふら。も。と。保質を寄せて。欺ざる。誠心を示す。何處許さん。後許す。然猶試ふ是を譲せよ。と。向れ。道節毫も。礙諱せ。御諱。恐れ。御仁心の至り。あいへども。今世の人心。誓言盟約背だ。保質をす。敵を謀ふ者間。是あつ。况や甲斐の武田。又。甘利。堺元。など。智謀の老黨。あらわす。開る臣も。ぐらく。知る所へ。傳聞を。も。票も。

あり。然ば信隆が降参ふ。保質をりくさればと。再議お及びで恩免も。物體をくやひんと。議もるを義成うちゆて。毛野が意見を向くべ然シ。道節が小心の量る所穩當也。危きもひども。豊臣俊の妄もひふ。今信隆の歸降の願ひを疑ふく。許もひそへ。御仁政ふ異同あり。後ふ是をの者、少へて縱今赦免の御書を賜り。信隆実の歸服せむ。悄地謀るうありとも。扇谷の士卒那意を悟ら。御書あるもとのを知る。反く信隆を疑ふべ。然ば是做きて。反間の計。行ひるをともひ。孰の方小も御方ふ益也。使ふ御書を賜り。信有もとを保質ふ。留りく且信隆の意表の虚實を齒もふ。若とやひべと答應せば。道節も悟り。獨點頭くのを。義成遂おの議不仕立。則赦書を兩個の使ふ。取せく返一遣し。信有をの。稻村を底清澄ふ預けひ。稻村を底清澄ふ預けひ。

